も、学生総数 200 というわけで、自然に囲まれた美しい環境は（今はその鉄道もない）羨ましい位であった。ザックスの勤めた農学教室も彼が研究した部屋も残っており、感慨深かった。

ドレスデンをこうして通過したので、戦後ようやく数年前に再建された“Semperoper”(オペラ座）を見たい、という私の希望でこれを外観だけ眺め、私たちは国境へ急いだ。

一般に東側で学会が開かれる時、航空機にしろ、汽車にしろ、出入国手続がうるさく、殊に東側の官僚的なやり方は単に腹立たしいだけでなく、ある種の緊張感や不安感をもたせることは多くの人の経験するところだろう。車で東ドイツに出入りしたのは今回はじめてで（ベルリンは別として)、行きも帰りも Coburg 近くのチェックポイントを通った。国境の役人は制服でいかめしく、笑顔もなく言葉少なく、また待たされた狭い道の両側は窓のない事務所のような建物であった。ギムラー教授の緊張した顔とヒソヒソ話は印象的であった。その建物（両側）の壁は実はすべてガラス窓で、外から見えず、内から我々を監視しているとのことであった。

アウトバーンの快適さは多くの方々御存じのとおりであるが、東側のそれはデコボコ道で、速度制限も 80km, しかも方々で交通警官が監視しているので、ギムラー教授は、東側では打って変わった慎重な運転ぶりであった。往路は国境で 1 時間待たされたので、帰路は出来るだけ急いだ（国境は夜中に閉鎖される）が、通過は 30 分で済み、11 時頃西側へ無事戻ることができた。近くのドライブイン・レストランに入り、我々は思わず祝杯をあげたわけである。

東ドイツ、チェコスロバキア、ブルガリアなど東欧諸国で比較的多くの、しかも比較的小規模の会議が開かれ、西側から人を招くのは（旅費を出してくれることは極めて稀である）やはり理由があるのではないだろうか。その大きなものの 1 つは、彼等が西側で開かれる会議に自由に出席できない（学術雑誌も自由に買えない）ため、情報を手に入れることが少ないことであろう。これは政治的および経済的理由によっていると考えられる。パーティーなどでも政治の話しは避けたがるし、若い人たちの中には東ドイツマルクを西ドイツマルクと公定レート、つまり 1 対 1 で交換してくれ、という者もいる。5−6 倍のもうけになるからである。このようなブラックマーケットは他の東欧諸国でも見受けたし、最近は中国でも出始めたときく。

何度目かの東側で開かれた会議に出席し、研究や発表の自由、研究者間の交流の自由、そして政治的言論の自由など、それに生活水準その他、私たちが享受している豊かさの有難味を再認識しながら帰国の途についた。(日本植物生理学会通信 41：10−12、1987)

「ライプチヒ大学植物園」

1. ゲーテと植物園

1992 年 7 月 16 日、ライプチヒ大学植物園においてその創立 450 年を祝う記念式典が開かれ、その日に記念切手が新旧首都のベルリンとボンにおいて発売された。植物園長の G. K. ミュラー教授はその祝辞でゲーテの「イチョウの葉」についてふれ、創設 450 年の記念樹として 2 本のイチョウの幼木を植えた。

銀杏の葉

これはるばると東洋から　私の庭に移された木の葉です

この葉には賢者の心をよろこばせる　ふかい意味がふくまれています

これはもともと一枚の葉が　裂かれて二枚になったのでしょうか
　それとも二枚の葉が相手を見つけて　一枚になったのでしょうか
こうした問に答えられる　ほんとうの意味がどうやらわかってきました
　わたしの歌を読んであなたはお気づきになりませんか
わたしも一枚でありながらあなたとくずばれた二枚の葉であることが
（1815年作、井上正蔵訳「ゲーテ詩集」旺文社文庫）

この植物園にとってイチョウは2つの意味をもつことをのべたとミュラー教授からきいた。まず、その葉の形が大学とライプチヒ市との不可分の連帯関係を示す、というのが第1の意味で、これはいわば植物園管理者という立場からの発言であろう。第2にはつぎのような植物学的な意味を示す。

この植物園はあとでのべるように、1876－77年に現在の場所に移され、当時の園長J. シェンク教授によって整備され、このとき3本のイチョウが植えられた。これらのイチョウの木は現在10メートルを越す大木に成長しているが、すべて雄木であった。3、40年を経なければわからないが、創設450年を記念して植えられたのはすべて雌木のはずだ、と長身のミュラー教授は笑顔で説明してくれた。

ハイデルベルク大学についで1409年に創設された、ドイツで2番目に古いライプチヒ大学といえば、ゲーテをはじめライプニッツ、ニーチェら、ドイツの誇る知識人が多く学んだところである。ゲーテはライプチヒを心から愛し、次のように書いた。

Mein Leipzig lob ich nun.
　Es ist ein kleines Paris und
　bildet seine Leute.
（私のライプチヒを私はただただ賛美するだけだ。
　それは小さなパリのようで、人々を育む）

ゲーテはライプチヒ時代（1765年入学）にアウエルバッハケラーで「ファウスト」の着想を得たとつたえられるが、ストラスブール遊学後数々の名作を著わし、1775年ワイマールに移ってからは自然科学に興味をもちはじめ、1790年には「植物の変態に関する試論」を著した。ゲーテがライプチヒ大学植物園に園長のJ. ヘドウィック教授をしばしば訪れたのは1796－97年の頃で、植物の顕微鏡観察に大変な興味をもっていたという。植物園は当時市南部の市壁の外、グリムナイス通りにあった。

2. 修道院薬草園から

16世紀なかばにはヨーロッパの多くの大学、とくにイタリア諸大学、たとえばパドヴァ、フィレンツェ、ボローニアにおいて植物園が創設されたが、それらは医学部の薬草園（Horti medici）であった。ドイツにおける植物園のはじまりは修道院薬草園、とくにベネディクトおよびドミニコ修道院のそれであった場合と、選帝侯の庭園であった場合に分けられるという。前者の例はこのライプチヒ大学植物園で、後者の例はボン大学ポッペルスドルフにある植物園などに見られる。いずれも大学医学部付属薬草園となり、やがて植物学教室創設によって理学部植物園に発展している。ライプチヒ大学の場合、理学部に移管されたのは1851年である。我

が国でも小石川の東京大学理学部付属植物園が旧幕府の薬草園にその源をもっている。

ライプチヒ大学植物園はもともと聖パウル修道院の薬草園であったが、1542 年にライプチヒ大学に移管された。この植物園は 1684 年、前述のように市壁の外に移転したが、約 200 年後市の東南の現在の場所、すなわちリンネ通り、ヨハネス通りおよびフィリップ・ローゼンタール通りに囲まれた敷地にさらに移転したのは 1876－77 年のことである。当時の園長 J. A. シェンク教授は植物園の発展に尽くすとともに新しく植物学教室をヨハネス通りに面する園内に建設した。

薬草園をもっていた聖パウル修道院も大学に移管され、大学教会として 1968 年まで存在した。そして、市の東アウグスト広場（現在はこの広場を挟んで北にオペラ劇場、南に新ゲヴァントハウスが建っている）に面したもと薬草園の反対側に修道院に隣接して大学本部が広場の西側に建てられたのは 1814 年のことである。

現在の植物園は約 3 ヘクタールの面積をもち、シェンクの後任で生理学者の W. ペッファー、そのあとの W. ルーラントの時代に実験温室が整備され、保有植物も 5000 に近くなった。しかし、1939 年に第二次世界大戦が勃発し、1943 年 12 月 4 日早朝、ライプチヒは英空軍による大空襲を受け、市街はもとより植物学教室、実験温室を含む植物園は徹底的に破壊された。ソ連占領下にあったライプチヒにおける戦後の復興は困難をきわめ、園内に小規模の温室が三棟建設されたのは東西ドイツ分裂の 1949 年であった。その後社会主義国家体制のもと、1951－54 年にかけて実験温室が再建され、保有植物種も 1955 年には約 4000 種となった。しかし肝心の植物学教室はいまだに再建されず、タール通りにある動物学教室の建物の一部に同居したままである。

筆者がはじめてライプチヒに赴き、この植物園を訪れたのは 1977 年のことで、生理学の G. シュスター教授と植物園長のミュラー教授が園内を案内してくれた。そのとき見た植物学教室の焼けあとの石の基礎は現在でも筆者の記憶に生々しく残っている。

3. 聖パウル修道院の運命と東西統一

ペッファー教授に学んだ我が国の初期の植物生理学者たちと深いつながりをもつライプチヒ大学は戦後ドイツの東西分裂によってカールマルクス大学と名称を改めた。そして社会主義体制は大学の近代化を大幅に阻み、大学は苦難の時代を過ごすことになった。

この時代を象徴する事件がおこったのは 1968 年のことである。植物園発祥のところ聖パウロ修道院は前述のように大学教会として機能してきたが、時の国家評議会議長ウルブリヒトの命により破壊された。教授団、学生はこぞって反対したが、破壊は 5 月 30 日午前 10 時、彼らの眼前で強行された。これについて I. フロムホルト博士が写真を写していた。隣の大学本部は戦争中に被害を被ったが、そのときに無事に残った修道院はこうして政治的圧力によって消滅してしまった。破壊の目的は、修道院の存在が社会主義体制下の大学になじまぬこと、そして破壊後、社会主義にふさわしい広場の建物をつくることにあったという。聖パウル修道院の内部の壁の一部は現在、大学に保存されている。

二度目に筆者がライプチヒを訪れたのは、ペッファーのライプチヒ大学着任 100 年記念シンポジウムが開かれた 1987 年であった。そして、東西ドイツ統一後、もとの名称に戻った大学と

植物園を三度目に訪れたのは昨年 10 月である。おもな目的は隣接のハレ市において開かれた植物ホルモンに関するシンポジウムに出席することであったが、統一後のライプチヒの変化をこの眼で見たいという興味もあった。この機会に 450 年を迎えた植物園についてミュラー教授らに話しをきくことができたのは幸運であった。

ミュラー教授は植物園の今後の発展のための青写真をもち、その夢を語ってくれた。反面、ペッファー、ルーラント以来の伝統をもつ植物生理学教室の席はシュスター教授の退官後、後任人事が難航し、まだ決まっていない。統一後 2 年を経た現在も旧東ドイツと旧西ドイツの格差は大きく、給与、設備、住宅など大学人事にも影響が大きい。統一後、西側では税金が上がり、東側では物価上昇に給与上昇が追いつけず、大学の研究費も不十分で両者とも大きな困難に直面している。一部には統一に対する後悔と疑問も大きくなりつつあるときいた。

もとのライプチヒ大学に戻った大学植物園のイチョウが成長し、植物園と植物学教室が昔日の繁栄を一日も早くとりもどすことを祈るのみである。(岩波書店「図書」1 月号、13－17 頁、1993)

「リューベック市役所訪問記」

1. リューベック市長を訪ねる

朝から霧雨の降る、しかし穏やかで明るい朝であった。ハンザ都市リューベック (Lübeck) 駅で汽車を降り、駅舎を出て徒歩で有名なホルステン門を過ぎ、市役所へ向かった。市役所前のマルクト広場には霧雨のなか、市が立っていた。広場と反対側の市役所玄関に回ると、そこには日の丸が掲げてあった。どうやら私の市役所訪問のためらしい。ホール受付けで用件を次げると、「ヘル、プロフェッソール、ドクトール」と 2 階の市長室へすぐに案内してくれた。中世以来のすばらしい市役所の建物にしては簡素ですっきりした市長室でブテイヤ (Bouteiller) リューベック市長は私をにこやかに迎え、椅子をすすめ、自らコーヒーをいれてくれた。1 時間あまり懇談したのち、私は茨木市役所から託されたパンフレットなどの資料をリューベック市長に渡した。これに対し、ブテイヤ市長は山本茨木市長に見事なリューベック市の写真帳を託し、私にも 1 冊恵与してくれたうえ、近く山本市長へ返書を送ることを約した。ついでながら、茨木市もパンフレットくらいでなく、リューベックのように、文化都市らしい英文の本を作るべきだと感じた。

2. ことの起こり

それは 8 月 29 日 (土曜日)、倶楽部 2 階食堂において茨木市体育協会主催の第 18 回市民ゴルフ大会表彰式が開かれたときのことであった。引き続いておこなわれた懇親会において樋口義明社会公益委員と私が山本茨木市長、千葉助役と懇談していたとき、リューベックが話題になった。「とても奇麗な町ですよ」と私が言ったのがきっかけになった。10 月には会議などでドイツへ行く予定だった私は、ハンブルクへ行くついでに 30 年振りでリューベックを訪ねてみようと考えていた。このことを聞いた市長、助役は、できたらリューベック市長を訪問して貰えないか、と私に打診があった。その理由はつぎのとおりである。数年前、前茨木市長の時代、茨木市はリューベック市と姉妹都市関係を結ぶ、という話が持ち上がったそうで、市長らの一団